

「血流維持型血管内視鏡」が描出する大動脈内の粥腫内容物、血管内膜の断端、およびコレステロール結晶などの栓塞子が、網膜症、腎梗塞や、脳梗塞など、あらゆる末梢臓器疾患の発症要因として関与している可能性が、このほど大阪市内で開かれた日本血管映像化研究機構（JVIRO、理事長 児玉和久氏）のプレスセミナーで示唆された。

これまで、病理学など基礎医学領域研究で、未だ知られていなかった末梢臓器疾患を発生させた全体的な原因は、現在不明であった。その理由は、現在行われている非侵襲的検査法の限界によるもので、超音波の画像診断法では限界があり、体の奥深くにカドされている大動脈へのアプローチが不可能であったためだ。



JVIRO 児玉理事長

これまで、生体で冠血管や大動脈、さらには脳の血管の中を見るために血管内に挿入する内視鏡の開発が世界中で試みられてきた。だが、空洞に挿入する胃カメラとは異なり、血管内視鏡の開発には血液で満たされた管を観察できる②大動脈のスクリーニングが可能——などを特徴とする。ちなみに、大動脈の内視鏡検査も保険適用されている。

## 末梢臓器疾患発症要因として

# 大動脈内の栓塞子を示唆



平山氏

性を示唆した。

今後の展望については平山篤志氏（日本大学医学部循環器内科主任教授、附属病院長）が、「大動脈破綻の先制診断を目的とする血管内視鏡を用いた臨床研究（国内15施設参加）を進めている」と報告した。

さらに、「大動脈瘤、大動脈解離、それに伴う大動脈症候群に關して、早期先制診断による最適な治療選択、手術手技の改善、侵襲の軽減を行うことで、著しい救命率の向上、治療後の社会復帰が期待できる」との考えを示した。

平山氏は血管性認知症にも言及し、「若年時から大動脈に浮遊し、長時間

かけて継続するコレステロール結晶などの微小栓子の病態意義を解明することで、疾患の病因・病態の解明や抜本的治療法の開発につながる可能性がある」と述べた。

最後に児玉氏は、「血流維持型血管内視鏡が描出するこれまで未知の画像は、早急に研究し、対応を急ぐべき多くの問題を提示している」と指摘した。

その上で、「大動脈粥状硬化症による末梢臓器疾患の解明を臨床的病態学的協同研究の場へと発展させ、1日も早く種々の凶悪な疾病の克服に向けた一歩を踏み出せるよう努力を積み重ねたい」と抱負を述べた。

世界で初めてそのチャレンジに成功し、血流

管内膜の断端、50μm単位のコレストロール結晶——などを特徴とする。ちなみに、大動脈の内視鏡検査も保険適用されている。

児玉氏は、「この観察結果によって、過去に病理学上で指摘されている